

平成 28 年 7 月 8 日  
バンコク産業情報センター  
中野 秀紀

## 一般調査報告書

### ラオスへの投資について

当センターでは、日系企業のタイを中心としたメコン地域での展開について注視しておりますが、タイプラスワンの有力地であり、タイから見れば最も身近な国の 1 つであるラオスを訪問調査しました。

そこで、同国の概況、活動されている愛知県企業の実態を中心に特集します。

同国は、2015 年に建国 40 周年を迎え、人口衛星や鉄道プロジェクトに取り組むなど大規模な経済プロジェクトも少しずつ活発化しています。

町の中は、朝夕は首都のビエンチャンでは車が渋滞する光景が見られますが、これは、近年の自動車ローン普及、各種開発プロジェクトによる土地代収入が後押しとなっているようです。

一方で、まだまだ緑も多く、メコン川沿いでくつろぐ欧米人観光客の姿が目立つなど、高いビルが立ち並ぶバンコクと比べると、ゆったりとした時間が流れている印象です。

人口は、約 681 万人であり面積は 23 万 6,800k m<sup>2</sup> (日本の本州程度) となっています。公用語はラオス語であり、宗教は仏教です。

ちなみに、ラオス語はタイ語と近似しており、当方のタイ人ナショナルスタッフ (バンコク出身) によれば約 8 割程度の会話が理解可能なようです。

このことは、ラオスに拠点をもつ日系企業にとっては、タイの人材を活用した技術指導を行いうることから大きなアドバンテージとなります。

首都のビエンチャンには、大規模なショッピングセンターも、ここ 1~2 年で開業し始めており、ITECC、ビエンチャンセンター等では、人はまばらながら、ブランドショップ、フードコート、大規模食品売り場が整備されていました。一方で、建物内にはまだまだ空きスペースが多いのも印象的でした。

#### 1. ラオスの GDP 等経済概況

同国の第 8 期社会経済開発 5 か年計画(2016~2020)では、2020 年までに一人当たり GDP を 3,190 ドル、7.5%成長とすることを目指しています。

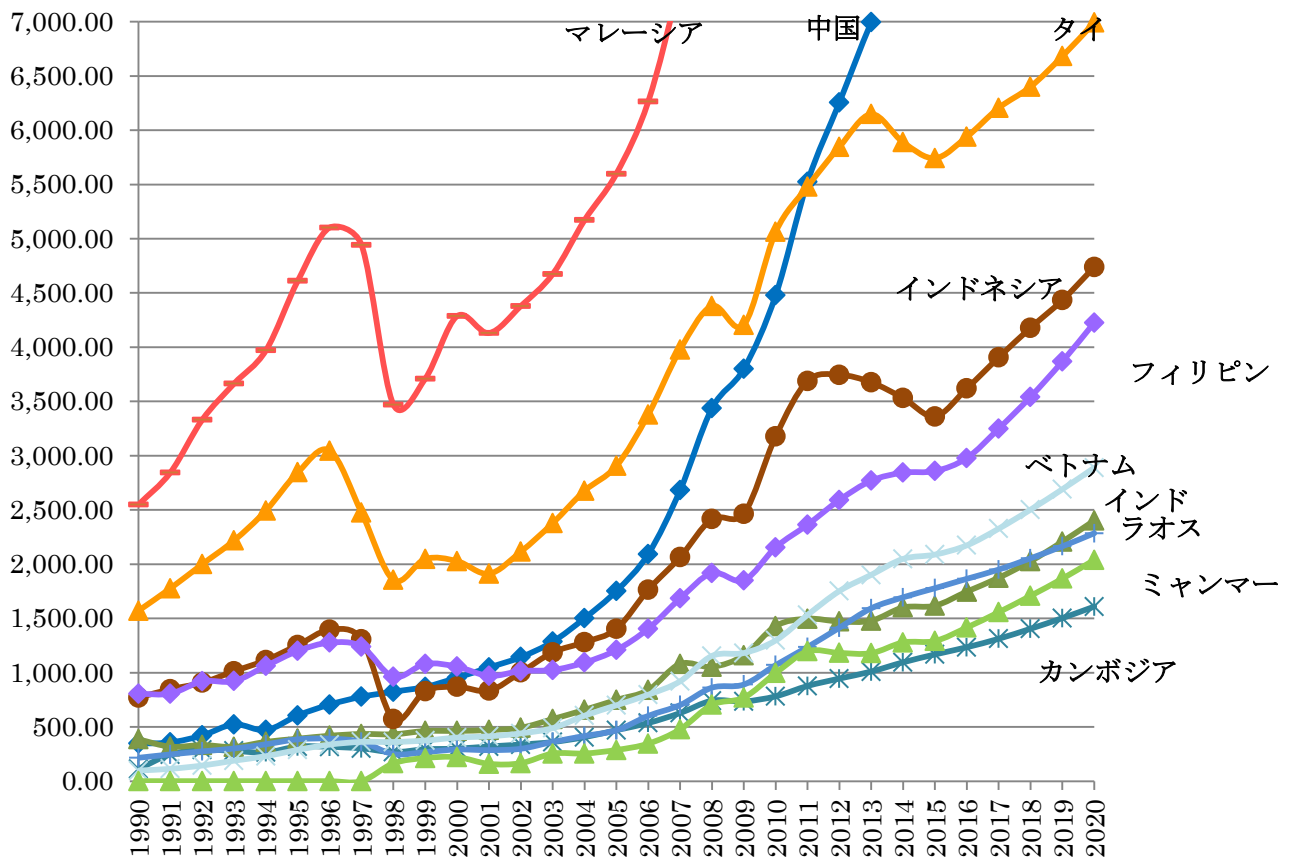
質・量を担保した高成長を達成するため、商業、生産の多様化を進め、国内需要と輸出を促進することで、持続的成長を目指しています。

同国の GDP は、農業が 22.7%、工業が 29.5%、サービス 39.4% (2015・2016 年) となっており、サービス業が約 4 割を占めるのが特徴となっています。



夕方のビエンチャン都心の模様

アセアン等各国の一人当たり GDP 推移 (単位: 米ドル)



出所: World Economic Outlook Database, World Economic and Financial Surveys,

International Monetary Fund(IMF)のデータをもとにして、当センターでグラフを作成

上記のように、IMFの予測(2016年4月期)においては、ラオスは2020年頃には1人あたりGDPが2,500ドル付近となることが予測されています。

この同国が目標とする3,000ドルというのは、家電などの耐久消費財の普及が進むラインとされています。(ちなみに、自動車の普及が進むのは、5,000ドル超です。)

## 2. 日系企業の活動状況

国別のラオスへの民間投資の許認可件数では、1989年から2014年までのラオス当局のデータによれば、日本は第6位となっています。

中国、タイ、ベトナムからの投資が多くなっており、先ほどの、鉄道、衛星プロジェクトも中国との関係が深いものとなっています。

現在、日系企業は同国へ約130社が進出しており、うちビエンチャン日本人商工会議所へ参画しているのは、約80社となっています。

進出日系企業数の増減は、タイでの事業業績にも左右されます。(日系企業のラオス投資は、タイ現地法人との事業関連性が深いため。)

ちなみに、去年はタイの景気に鑑み、伸びが若干落ち着いているようです。

業種としては、以前からの製造業に加えて、サポーティングインダストリーとしてのサービス業(コンサル、会計等)の進出が目立つようです。

## 2. 日系企業の活動形態

日系企業の海外進出戦略において、同国は、中国、タイといった日系企業の主要集積先の生産上の分業国としての位置づけが鮮明に見られるのが特徴です。

### ◇チャイナプラスワン

中国では熟練技能者、高度な設備、整備された物流網を活用し、主に流行の変化に対応すべき商品を製造します。

一方で、ラオスでは流行に左右されにくい製品を廉価な人件費を武器に安価に製造します。これは、縫製業に多く見られる類型です。

### ◇タイプラスワン

一つの製品を生産する際に、製造プロセス(工程内)で分業を行うのがタイプラスワンの概念です。

さらにこのラオスを舞台としたタイプラスワンは、以下の類型に分けることができます。

#### ・A事例(工業系)

前工程・資本集約的作業(タイ工場) ⇒ 後行程・労働集約的作業(ラオス工場) ⇒ 最終組み立て(タイ工場) ⇒ タイ国内外でメーカーへ納品

#### ・B事例(工業系)

前工程(タイ工場) ⇒ 後工程の大部分(ラオス工場) ⇒ 後工程の最終工程のみ(タイマザー工場)

\*技術的な要がタイ工場にあること。

加えて、メイドインタイを保持するため、後工程の全てをラオスへ移管せず、最終工程をタイで担います。

- ・ C事例（縫製系）

タイ工場：短納期、重たい生地、技術レベルが高い製品

ラオス工場：流行に左右されにくい製品

こちらは、製造する製品で分けているため、チャイナプラスワンと似た概念となっています。

余談になりますが、日本で販売されている「玩具入り入浴剤」が今までは中国製であったものが、最近ではメイドインラオスが多いことに気づかされます。また、日本で販売されている加工食品の下ごしらえがミャンマーにおいて手作業で行われるなど、人件費で優位な国々が日本企業、生活を支えていることを改めて実感します。

### 3. 投資環境等

立地場所について優遇施策の区分けがあり、最も優遇される第1地域の第1レベルでは、最大で10年の法人税免除期間が設けられます。

さらには、原料輸入時の関税免除、輸出時の関税免除、機械類・車両の輸入関税の免除等も揃っています。

同国のSEZ国家委員会が承認したSEZが12か所あり、うち9か所で入居が可能となっています。とりわけ日系企業は、以下3つの経済特区を中心に立地をしています。

ビエンチャン近郊のビタパーク（日系企業が4社）、中部のサバナケットのサワン・セノSEZ（日系企業が11社）、南部パクセのパクセージャパン中小企業専用SEZ（日系企業が6社操業）がこれに当たります。（ジェトロ資料等）

日系企業が進出するメリットとして、人件費のほか、周辺諸国と比較して安価な電気料金、タイとの国境でトラック積み荷の積替えが不要で通行可能なことが挙げられます。先述のとおり、言語がタイと似ており、現場指導においてタイ人が活躍しやすいことが挙げられます。

電気料金が安価な理由は、同国が内陸にあり、河川の高低差を利用した水力発電が盛んなことが挙げられます。

一方で、課題としては、国境での通関手続き、大規模な労働力の確保、輸送コスト等が挙げられます。なお、輸送コストについては、カンボジアとの国を挙げた競争もあり、低減が進んできているようです。

また、同国の地の利を生かして、日系物流会社がタイ、ラオス、ベトナムの三国間輸送サービスも展開しているのが特徴です。

日系企業が、同国への進出を決めるにあたり、3点を考慮する必要があります。①タイと比べた人件費の低減、②物流コスト③工員数の観点から見た製造キャパシティ。こちらの①～③のバランスを考慮することが必要です。

駐在員の生活環境としては、ビエンチャンについては、日本食レストランが 10 件程度、治安も良いため住みやすいと耳にすることが多かったです。

進出を検討する日系企業が、最も気にする要素の一つとして気質が挙げられますが、ラオスの方は、子供の頃から農作業、手作業に習熟しており、手先が器用な一方で、温和な性格で争いを好まない気質のようです。

ラオスの方から見た、日本人に対するイメージも、時間・約束を守るといった面が特に評価されており、相性は良いとも言えます。

特段、同国は小規模な人数をじっくり育てながら、軽くて小さいものを製造する拠点として向いているようです。

愛知県の中小企業にとり、その点では進出先として一考の余地があると思料されます。

ラオス政府筋の話として、中国、ベトナムからの投資が多いが、より日本の製造業にも多く進出してほしいとの期待が大きいようです。

#### 4. 現地での愛知県企業の活動例

今回は、株式会社トミナガの富永専務取締役にお話を伺いました。

同社は、2011 年にラオスのビエンチャン郊外へ進出し、業務用ユニフォーム等を製作する **Tominaga Lao Co., LTD** を営まれています、

以下、Q & A を展開します。(Q : 筆者 A : 富永専務取締役)

Q 1 : ラオスに進出された経緯をお教えてください。

A 1 : 取引先のラオス進出をきっかけに同国に興味をもち、視察に訪れたのが始まりです。

その後、リーマンショックでの計画変更等を経て 2011 年に独資でのラオス工場を設けるに至りました。

Q 2 : ラオス工場の役割をお教えてください。

A 2 : 陸路での物流コストを考慮し、大量生産できるもの(少量だと輸送コストがかかる)、技能の習熟度を考慮し、比較的作業が行いやすい製品を中心に製造しています。

一方で複雑なものは中国工場で生産をしています。

タイ又は日本から原材料を輸入、ラオス工場で縫製し陸路でタイへ輸送。その後、日本あるいはタイへ納品しています。

Q 3 : 従業員の労務はどのような状態でしょうか。

A 3 : 現在 200 名程度のラオス人の方がラオス工場では働いています。

中国人とタイ人が中心となって技能指導をしています。工場での勤務に習熟していない方も多いため、時間を守り勤務することから指導をすることも

あります。一人あたりの作業工程を細分化し、作業を分かり易く単純化する工夫などを行っています。

立上げ当初は、50人程度の人数から始めましたが、稼働開始には苦勞しました。

現時点、まだまだ作業効率は高くはありませんが、丁寧に作業を行う気持ちは伝わってきます。

Q4：進出のメリット、課題はいかがでしょうか。

A4：メリットは、人件費（最低賃金は112.5ドル/月）及び電気代（タイの3分の1）がとても廉価であることです。

一方、課題としては、物流コストであり、効率化のため複数製品の納期をなるべく一致させることが肝要です。

Q5：同国への進出を検討する企業へアドバイスをお願いします。

A5：人件費の高低だけで事業運営、進出先を検討すべきではなく、生産効率、ロジスティクス面等を全て踏まえて議論すべきだと考えます。



訪問をさせていただいた Tominaga Lao Co., LTD（ラオス・ビエンチャン郊外）

以上。

本資料は、参考資料として情報提供を目的に作成したものです。

バンコク産業情報センターは資料作成にはできる限り正確に記載するよう努力しておりますが、その正確性を保証するものではありません。

本情報の採否は読者の判断で行ってください。

また、万一不利益を被る事態が生じましても当センター及び愛知県等は責任を負うことができませんのでご了承ください。